

水族館における展示手法について

株式会社丹青社 高柳 敦

一、水族館展示の変遷

日本の水族館展示は一八八〇年代の博覧会に端を発する。当時は珍奇な生物の見世物的興味で集客する施設であった。上野の「観魚室（うをのぞき）一八八二」「浅草水族館一八八五」「和田岬水族館一八八九」などが初期の水族館の原型である。当初は小型の水槽を汽車窓風に陳列して見せるものであった。その後、一九四〇年までに約六〇館の水族館が各地に開館することとなる。

そして、一九五〇年代以降は、戦後の経済成長を背景にレジャー産業が活気付き、水族館ブームが到来する。これまでの小型の水槽展示から、水槽設備の近代化・大型化が加速することになる。オイ

ルシヨックの影響で、一時的に水族館建設は下火となるが、一九八〇年代以降はアクリルガラスの技術革新が進み、巨大な水槽展示が可能となり、大型水族館が各地に建設されることとなる。葛西臨海水族館（一九八九）、海遊館（一九九〇）、八景島シーパラダイス（一九九三）などがこれにあたる。

施設の性格も観光的な役割だけでなく、現在では自然環境の学習施設としての役割を担うようになっていく。環境エンリッチメントといった動物の福祉、地球環境をテーマとした施設などが多くつくられており、これまでの水槽展示に加えて、生き物との積極的なふれあい体験や、映像演出、空間演出を加えた複合型の展示手法を取り入れ、観覧者に多様な体験が提供されるようになってきている。

水族館は当初の見世物的興味の展示から、自然環境学習の拠点となる学習施設としての性格をより強くもつようになった。現在では野生動物の保護や生物多様性を学ぶ場としての側面があり、地域の学校教育と密接な連携も図られている。こうした効果を高めるために、水族館の展示では水槽展示に加えて、文化・社会的側面まで視野を広げた多様な情報提供や、さまざまな体験プログラムの提供が求められるようになっていく。展示生物の解説パネルや映像による情報提供に加えて、生物に必要な環境やその保全を伝える情報提供、さらには、観覧者が生物の生息環境をイメージできる体感型の空間演出なども展開されている。

インバウンド需要の増大に対応する多言語による情報提供や、Twitter等SNSを活用した新たな情報訴求もこれまでにない新たな展開であり、ICT技術の活用は必須要素となってきた。

二、上越市立水族博物館について

最新の展示事例を報告する。
新潟県上越市の水族館が「うみ

がたり」として、二〇一八年六月にランドオープンした。本水族館の歴史は古く一九三四年には個人の水族館として開業し、一九五四年には直江津町に移管され、市政施行により「直江津市立水族博物館」に、その後、直江津市と高田市の合併により「上越市立水族博物館」となった。実に八〇年余りの歴史を誇る水族館である。

「うみがたり」はエントランスを入ってエスカレーターで三階へ上がると大水槽があり、その水面が日本海とつながって見える大胆な建築的工夫がなされている。

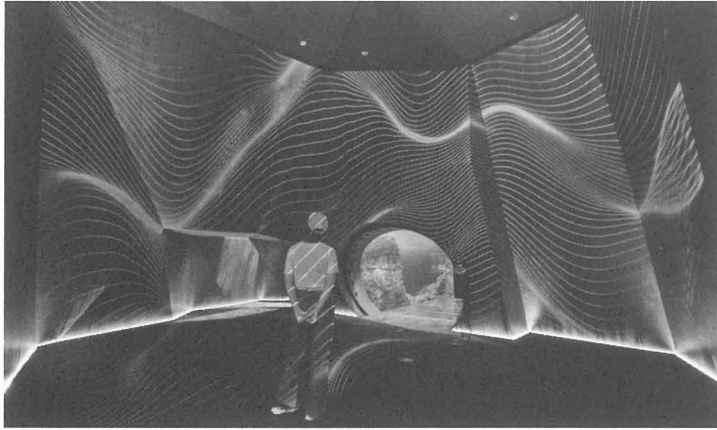
施設内は「日本海が語る」「生きものと語りあう」「未来へ語り継ぐ」の三つの展示ゾーンで構成されている。

二階の「生きものと語りあう」展示ゾーンでは、世界の海に暮らす多様な生物が展示され、シロイルカやバンドウイルカなどの人気の生物や、クラゲ、珍しい深海魚が展示されて人気のゾーンとなっている。また、「未来へ語り継ぐ」展示ゾーンではマゼランペンギンの飼育展示があり、施設内飼育数が世界最多となっている。

三、映像を軸とした空間演出

展示は解説を最小限にとどめ、生物とのふれあいやコミュニケーションを増やすことに配慮している。

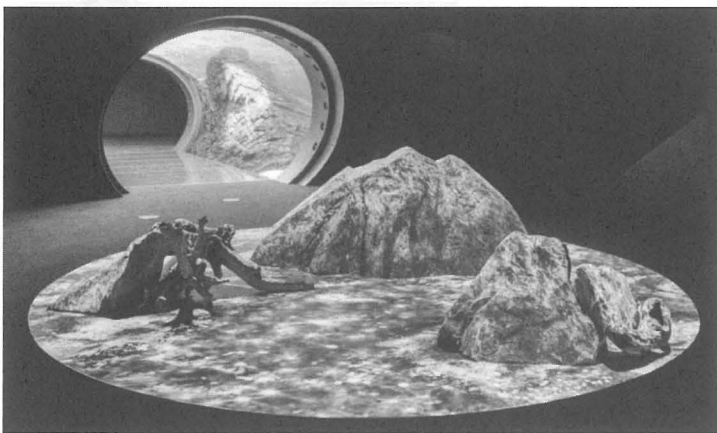
また、うみがたりが将来に向けてさまざまな取り組みを行っていくことを踏まえ、未来感を感じられる施設とするために、展示の軸に空間演出が用いられている。



日本海の今の様子を視覚化し空間に投影する「日本海データアート」

アクリルガラスでできた水中トンネル「うみがたりチューブ」の

前後のスペースで映像による演出が導入されている。手前のスペースでは「日本海データアート」という演出を展開し、日本海の波の高さ等のデータをリアルタイムで取得し、デジタル波形に置き換えて観覧者に体感してもらえようにした。詳しい説明をあえて省くことで、観覧者に「これ何？」という疑問をもってもらうことで、日本海の自然環境への興味を高めようという効果を期待した。



上越市の自然環境との融合を意図した映像演出「ザ・ガーデンシアター」

もうひとつは「うみがたりチューブ」を抜けたところで展開する

「ザ・ガーデンシアター」である。ここでは人工的に再現した庭園にプロジェクションマッピングで上越市の自然景観を投影、四季を体感できる演出を行っている。日本海や上越市の自然環境との融合を意図した感覚体験型の手法であるが、映像制作にあたっては実際に上越市内でドローン撮影を行い、水族館の演出としてリアリティを求めたものとなっている。



魚群の行動パターンを数値化し壁面へ投影する動線誘導演出

こうした空間演出の導入は、日本海や上越市の自然環境との融合が意図されている。生物の展示だ

けでなく、多様な展示手法を組み合わせることで、観覧者の満足度を高める水族館展示となっている。



マゼランペンギンのコロニーを描いた壁面に触れるとペンギンが生態行動するインタラクティブ映像演出

高柳 敦 ● たかやなぎ あつし
株式会社丹靑社 デザインセンターチーフディレクター。
水族館展示の企画設計に長年携わる。展示設計の実績として、島根県立しまね海洋館アクアス、アクアワールド・大洗、西湖ネイチャーセンター・クニマス展示館他多数。
日本動物園水族館教育研究会会員、日本鯨類研究協議会課。